

2022.4.21-25
MITAKA SCHOOL / TOKYO

- ・本上演はインスタレーション／パフォーマンスの形式をとっておりますため
観客席がございません。美術鑑賞と同じく、自由な位置で動きながら鑑賞ください。
- ・身軽なご鑑賞をいただきたいため、お荷物預かりの用意がございます。受付までお申し出ください。
- ・ご事情、ご体調により椅子が必要な方はご遠慮なくスタッフまでお声掛けください。
- ・パフォーマンスの写真撮影、動画撮影は自由です。お好きな角度からご撮影ください。
またその際は他のお客様が映らないようご注意ください。
- ・キャプションに記載のあります作品にはお手を触れないようご協力ください。
- ・他のお客様にご注意いただければ SNS への投稿も歓迎しております。
- ・上演中は不織布マスクの着用をお願い致します。
- ・受付に不織布マスク、フェイスシールドの用意がありますのでご希望の方はお申し出ください。



『クバへ／クバから』

上演化プロジェクト

出演：石川朝日

赤松あゆ

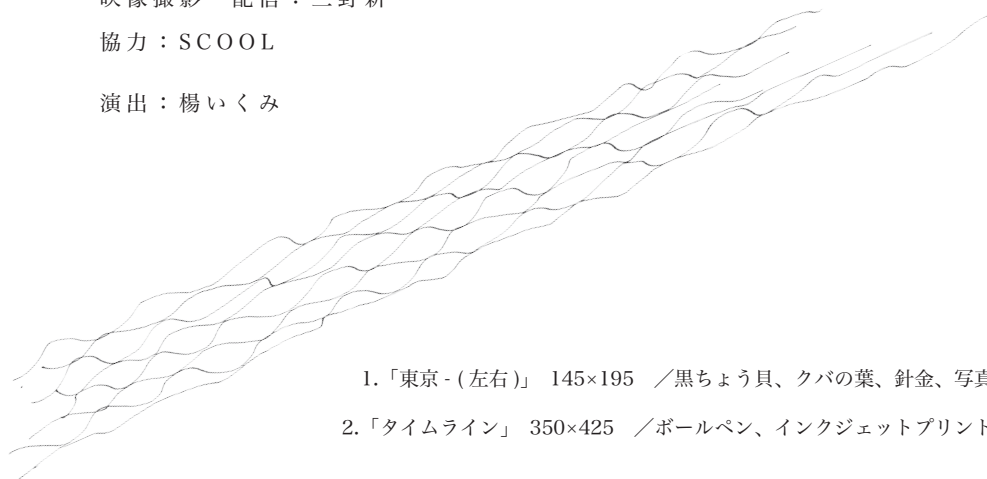
MARU OHREI

音響：梅原徹

映像撮影・配信：三野新

協力：SCOOL

演出：楊いくみ



1. 「東京 - (左右)」 145×195 / 黒ちょう貝、クバの葉、針金、写真

2. 「タイムライン」 350×425 / ポールペン、インクジェットプリント

3. 「手 (右)」 152×210 / リハーサルメモ、ゴシキカノコ、クバ、写真

4. 「骨 (右)」 235×267 / チャフの葉莢、ミドリツノガイ、父の遺品、写真

5. 「亀 (左)」 152×210 / 亀甲網、琉球絃、写真

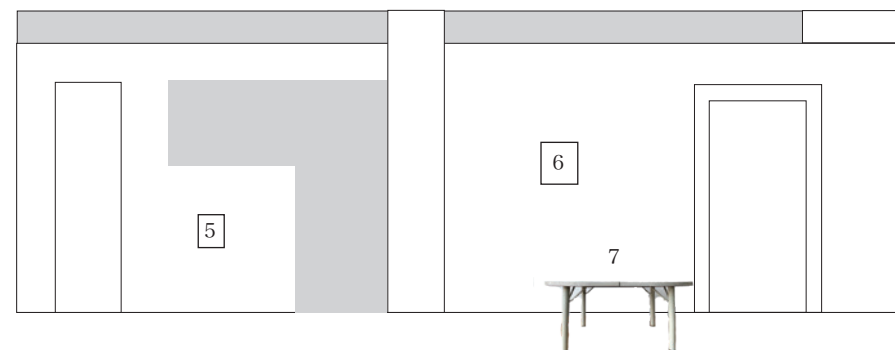
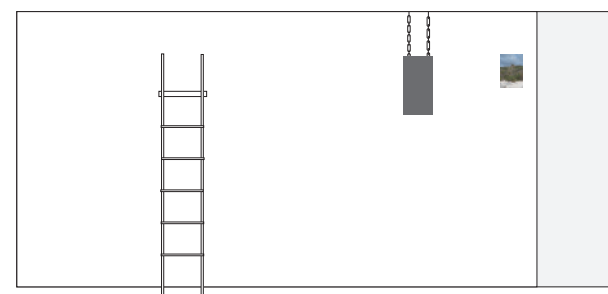
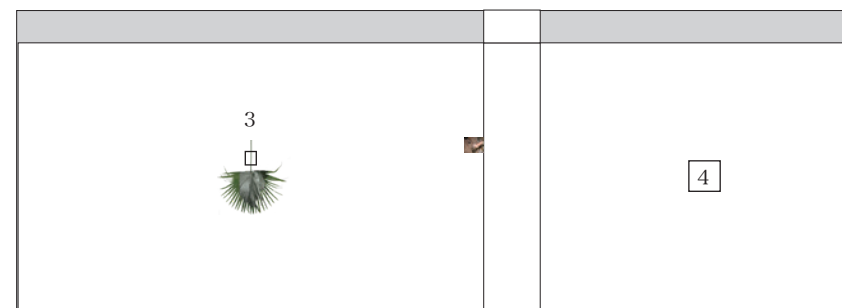
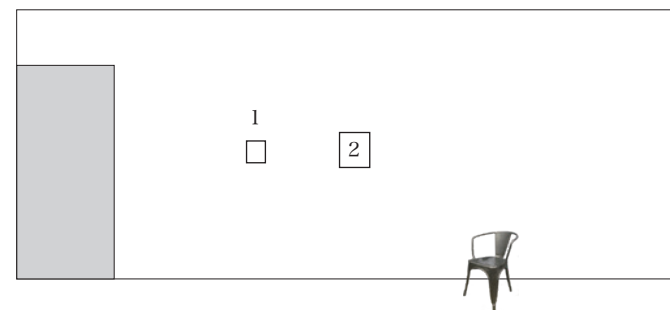
6. 「近 (右)」 350×425 / 首里織、葉莢、写真

7. 「左右」 90×120×70 / 90' s メキシコ産テーブル、砂、写真

(写真撮影すべて：三野新)

※キャプションにある作品はご購入いただけます。

ご希望の方は受付までお問い合わせください。



[To/ From KUBA]

Performance Project

本日はお越しいただきありがとうございます。楊いくみです。

今回の上演は『クバへ／クバから』にとって初めての上演になります。そしてタイトルを「上演化プロジェクト」としているのは、今回の上演が「本公演」を目指したワークインプログレスの上演になっているからです。

私は自分の作品でこのようにテキストを寄せるということはほとんどしてきておりませんでした。今回はこの上演化の実践に立ち会っていただくにあたり、できる限り詳にした上で鑑賞にご協力いただきたいと思い、以降慣れない拙文にて恐縮ですがお付き合いいただければ幸いです。

今まで、ある戯曲から作品を作るということはいくつか作ってきましたが、今回の『クバへ／クバから』は戯曲であると同時に写真集であります。このような本が世界にどれだけあるのかはわかりませんが、私にとっては作品化するのはもちろん読むのも初めてのものです。演出のお話をもらった時は、この本に存在する時間軸や距離の話に自分の作品との共感を覚えてすぐに作品にできるのではないかと思いましたが、実際に動き出した時に初めてそれを制作するということの不自由さに気づきました。それはこの本の難解さや複雑さということではなく、ひとえに写真によって物語が紡がれているため、そもそも私からイメージが剥奪された状態であるためだったと思います。加えて三野さんの写真は、一枚一枚が本当に「写真」その物であり、その手前にも奥にもなんの寓意もないものとしてそこにあるため、連想の余地すらないものにも思えました。読者でいた時はそのイメージによって誘われた旅でありましたが、制作に回った途端その強度に自分の中に取り込むことは不可能なように思えました。

ならば例えばこの戯曲の指示通り、下手・上手に交互に写真を映し出し言葉を当てていくことがこの上演の最適解かと考えれば、それではすでに原本の方が良い上演を行っている状態にありました。(チラシのテキストにも少し書きましたが、この本はすでに上演を行っているように思えたのです)。

そこで、これが写真そのものが語る話なのならば、まず写真そのものについてから受け入れられないかと賭けたところで、結局はロラン・バルトが「明るい部屋」で写真について書いた「写真は上なく個であり、反響しない、あるがままのものであり～中略～指向対象と共にあり、それはある刑罰のように手足をびったりと死体と括り付けられた罪人のよう、あるいは永久に交尾している状態」という一文が今回制作するにあたりきつかけになる言葉になりました。

形式はどうか。もちろん客席を用意して一方向から見せていくことも考えましたが、先ずは上記の写真の状態、つまり写真がクバ（対象物）と共にある状態に、語ってもらうだけの時間が欲しく、ついてはそこに人間（パフォーマー）が入ったとてその時間と切り離し考えることは結局難しいだろうと、やはり普段の自分の形式と同じくインストレーションパフォーマンスの形式をとりました。

この形式においては、観客（みなさま）の鑑賞は移動を伴うことになります。移動の度に遠近（視点・距離・角度）は変わり、上演時間は共にしながらもその体験は（積極的であれ消極的であれ）一人一人のものとなります。三野さんは、本作巻末では「あなたの旅」と、そして今回のイベントは「引き渡しの儀式」と言ったように『クバへ／クバから』は尚更自分とは違うどこかで上演されるものではなく、自分（観客）のものになるべきだと思います。

とはいえ今回は広さの関係もあり、ある程度能動的に位置を探さなければ自分の経験にはならないかもしれません。そのため今回はこれがワークインプログレスであるということを前提に、その都度ご自身がみたい風景、落ち着ける場所を探しながら鑑賞にご協力をお願いいたしたく、この文をしたためている次第です。

最後に、私は今回リサーチとして初めて沖縄へ行きましたが、ちょうどその時にこの度のウクライナ侵攻が始まりました。私が今まで「遠近」について考え作品を作ってきたのには、今まであった戦争をはじめとしたこうした出来事と、生きていくことを考える方法でもありました。それは自分の背景と、生まれた時代と向き合っ出た答えのつもりでいましたが、それでも今回のことは制作の手を止めるには十分の出来事でした。しばらくは思いつくアイデアが本当に自分の考えか、それとも毎日のニュースに影響を受けてのものなのか分からない時期がありました。また沖縄について考えながら、そのニュースと混同してしまう怖さからその時は早く何かを取り戻したい気持ちでありました。

もう一度『クバへ／クバから』読み返します。『クバへ／クバから』は左と右の写真が、クバという植物を中心に会話をしている話です。会話内容も基本的に写真内の描写で写真同様その手前も奥も無いようになっています。もちろん対象物：クバの環世界は人間中心のこの世界とはあまりにも違います。ですがその時は、クバを描写し続けているのと並行して、左と右がずっと迷いながら移動を繰り返していることの方に気がつき、それ以降はその姿勢があまりにも人間的である様にとっても支えられました。『クバへ／クバから』は「距離」の話で、そして「私」というものを引き渡していく話ですと三野さんは話していましたが、改めてこの本が刊行されるまでのプロジェクトに敬意を示すと共に、上演に際しては少しでもその“私”や“左と右”を「引き受ける」ということができればと思います。

Spring

Left

summer

autumn



Right

Right

winter

Left

a week ago or 10 yrs ago

